

今月の 我がマチの 一番星☆



食肉加工場内において

安全で安心される 牛肉を消費者のもとへ



内藤順介・圭子夫妻

「草を食べる牛は微生物と4つの胃を使い、人にたんぱく質などの栄養を供給してくれます。しかし、現在の日本の畜産は、経済性を優先するためトウモロコシなどの穀物を大量輸入して与えているのが現状です。こうした現状に疑問を持つ消費者が都会を中心に増えてきています」と話す早来緑丘でアングス牛の牛肉販売をしている内藤順介・圭子夫妻は、BSE問題や偽装事件をはじめ食肉に対する信頼が失われたことを嘆いています。

イギリス原産のアングス牛は外国種の中で肉質が優れ、粗飼料でも育つ丈夫な牛で、消費者に安心して食べていただくため、輸入穀物は使わず牧場内で自給できる牧草や道内産の穀類などを使用。家を

改装し加工場を作り、肉を直売しています。「安全でおいしい肉を皆さまの食卓に届けたい」という理想は今も変わっていません。牛肉料理のレシピや近況など手作り通信を一緒に送付。今月で100号になりました。健康な牛を育て直接提供し生産者と消費者の間に絆を築いています。

毎年3月に開催されているアングスカップフットサル大会の副賞にアングス牛の牛肉を提供したり、学校給食のメニューにも使われています。北海道アングス牛振興協議会の会長をしている内藤順介さんは北海道の気候や条件に適したアングス牛をもっと増やして、霜降りが入る黒毛和

種とは違う赤身の味がしつかりしたアングス牛の肉の魅力も多くの人に味わってもらい、町の特産を夢見ています。「健康な牛を育てることは私たちの健全な体づくりにつながると思います」と優れた牛の育成について熱く語っていました。

「野球バカ」で40年



片倉芳春さん

「大会があるから練習があり、勝つためには相手以上の練習することを心がけてきました」と語る野球指導者の片倉芳春さんは、高校時代は補欠選手すらなれず、職場チームでも良い結果を出せなかったといいます。就職後野球審判員の資格を取得して40年。野球仲間を誘い「追分クラブ」を結成し昭和53年に全国大会に出場しました。

天皇陛下がご臨席する「天皇賜杯全国大会」が北海道で開催されたとき、片倉さんは道内約6,000名の審判員の内200名の中に選ばれ、模範審判員の一人として研修会でジャッジの見本を披露しました。

昭和55年ころに少年野球の指導者の一員として強いチームを育て、連戦連勝の輝かしい実績を残しました。部外者から指導方法を指摘され、それをを機に、しばらく一線から退いていましたが、保護者から「優勝できる強いチームを作ってほしい」と依頼されたとき、「自分の指導方針に合わず野球を辞める子も出るかもしれませんが」と要請を一度は固辞しました。しかし、再三の申し出に対し片倉さんは親の熱意を感じ再びグラウンドに。子どもたちから「どれだけ厳しい練習でも構いません」と言われたとき、選手の真剣な志を痛感。教えた子の小学生の卒業文集を読むと厳しい練習や優勝した喜びなどが掲載されていました。



中学校野球部の指導者として表彰される

子どもたちのサインボールや寄せ書きを見ながら「強いチームを目指し苦楽を共にした選手たちは現在、高校野球で活躍しており、試合も見に行きます」と交流は今も続いていると話していました。